

No. 993

紙芝居人生

年が明けて、また一年をとった。川見深一さん81才。

昭和5年に紙芝居をはじめて、今まで40数年、深一さんは、紙芝居ひとすじに生きてきた。苦労かけっぱなしの妻モトさん（75才）の孝行にと好きな酒もやめて8年になる。深一さんには夢がある。それはあと20年のまま紙芝居を続けて、百才になったら紙芝居をもって日本全国をまわるのだという。夢をモトさんと語り合うのも日課になった。

ハンチングにセーターキャハンドを巻いた足にズックぐつという変わらぬスタイルで、北区滝の川の一角を、深一さんは、荷台にしっかりと固定された紙芝居をのせて、自転車を転がしていく。路地裏を抜け、商店街を通り、八幡様の境内に向かう。途中、道路で遊ぶ子供達に気軽に声をかけていく。

子供達は、手に10円玉を握りしめ、境内にやってくる。そしてセンペイや水アメを買う。境内は子供達ばかりではない。近くの老人のいこいの場でもある。一時の幸せを楽しむ老人達。そこに影はない。子供達相手に生きてきた深一さんはまた幸せな老人の一人だ。

笛を合図に紙芝居がはじまる。いつの世にも、子供達は、強いものにあこがれる「出しもの」は「黄金バット」だ。昭和のはじめ、深一さんは、やりはじめた頃と変わらない。

『子供相手に話すのが若返りのコツですよ。おかげでいまだに36才の気性でね。』

『好きな商売で自由に生きて私ほど幸せもんはどこにもおらんと思うてます。紙芝居ひとすじに生きる深一さんは。日本全国をまわる夢と、幸せをかみしめて今日も、路地裏を自転車で行く。』

列島変貌 —青森県・六力所村—

『1月9日、むつ小川原、開発促進派の有力村議橋本勝四郎の議員解職請求、及び16日開発反対の先頭に立つ寺下力三郎村長解職請求は正式に受理されました。青森県上北郡六カ所村選管が正式に告示したのを受けて、『むつ小川原開発』の賛成。反対派はリコール合戦をスタートした。一昨年8月、むつ小川原工業開発区域に指定されて以来、これまで静かな農村であった六カ所村は荒れ狂う開発の波に揺れ動いた。

『しゃせん、出稼ぎしなければ、食ってゆけない過疎地だ。この機会に土地を売って工業を誘致すべきだ』という賛成派。

『開発は公害のもとだ。財産（農地）を手離したら農民の負けだ』という反対派。村では秘密会と呼ばれる部落単位の会合が毎日のように開かれた。しかし賛成派と反対派の意見は真向うから対立。ついに両派の旗頭のリコールへとエスカレートしていった。

寺下村長が『村民は巨大な不幸を背負ってくる巨大なホラに追われようとしている。私はこの開発に政治生命をかけても反対する。開発難民は出せない』と主張すれば、

開発委員長の橋本氏は『村会議員は皆、賛成派だ。賛成するのが、村民の為であると信じている。村長リコールに踏切ったのは、反対派が私をリコールしたからだ』と強気。広大な、六カ所台地では牧牛がのんびりと冬の日差しを浴びている。シベリアから渡ってきた白鳥が旅の疲れをいやす沼は開発後は巨大な港に変わると。農民の動搖をかりたてるかのように、不動産や土地ブローカーが暗躍し、畠地には農作物のかわりに×××不動産、の看板が並んだ所もある。

列島変貌とは、国土を変えるばかりでなく、自然界の法則や人間の心をも変えてゆくようだ。